

# 深澤利重

## 復刊版

念紀  
—  
重利澤深

群馬地域文化振興会

念 紀

重 利 澤 深



## おことわり

父利重の永眠に就て、各方々からの温い御同情を受けました時、之れ等にお應へするに、一片の儀禮的御返禮にてはと感じ、何にかよき紀念を、と考へて出来たのが本書であります。

母は、この企に、かるい反対をいたしました。祖父雄象に就て、さうした物が遺されてゐないのに、利重のみを斯く扱ふのは面白くない。といふ理由からでした。

私は、さう思ひませんでした。茲に企てたものは、父利重の功績を傳へんが爲のものでなく、あの變り者の父、我儘の言ひ度い丈を言ひ盡して行つた野人に、意外にも皆様の温い御同情のふり灑がれた情景を紀念いたし度い微意に他ならないものだからであります。

けれども父を送つて、感傷的に、沈溺した子等の企が、正鵠を失して居りましたならば、唯に御寛恕を乞ふのみです。

尙ほこの企に御援助を給はりし方々に厚く御禮申し上げます。

千九百三十四年暮

諸氏よ

彼が識ると

識らずして犯せし罪を

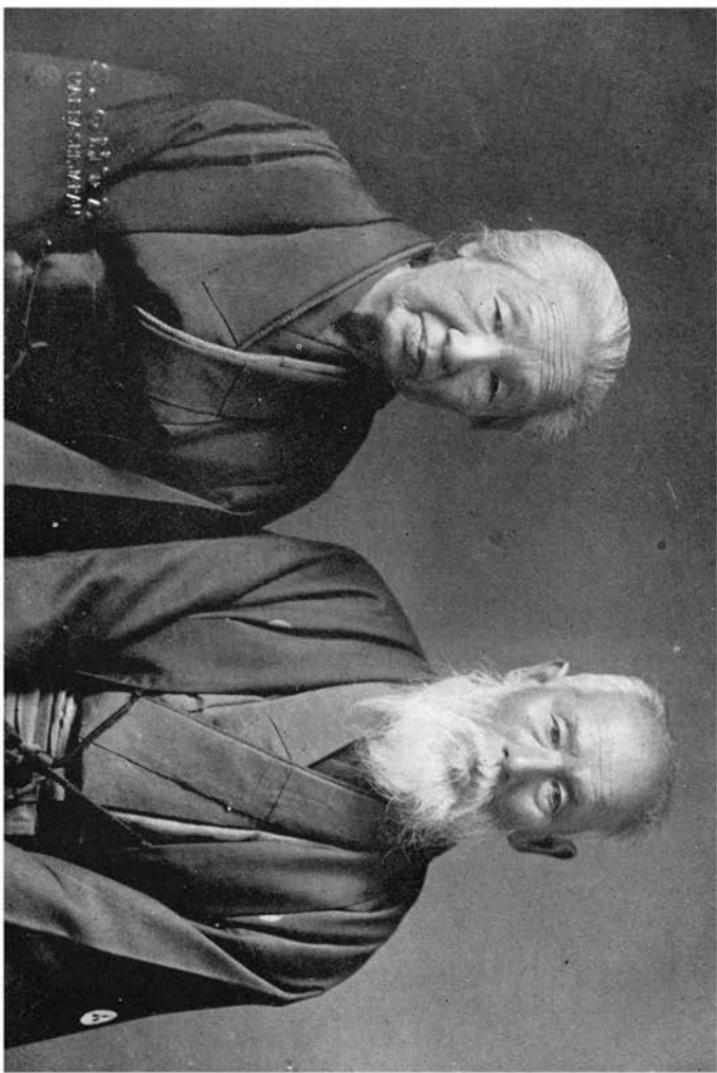
赦させ給へ

銀 婚 式 紀 念





金 婚 式 紀 念





鷄 飼 老 爺







深澤雄象



# 目 次

## 一、深澤利重遺文抄

深澤君の遺文に序す.....木下尙江氏.....一

一、日本蠶業論.....桑島定助氏.....五

二、日露時局論.....五三

三、謹みて同業者諸君に.....七一

## 二、略歴並に評傳

一、故深澤利重氏の略歴.....桑島定助氏.....八一

二、神の僕スピリトン深澤利重翁.....前橋正教會司祭 大澤正氏.....九五

## 三、友 情

一、翁と余とは相見ずして早く友なりし.....相馬愛藏氏.....一四三

二、逝ける好友深澤君を偲ぶ.....住谷天來氏.....一四六

三、深澤利重君と野老	宮本達夫氏	一五三
四、故深澤利重翁と悲壯な選舉運動	大沼魯夫氏	一五九
五、深澤利重翁を憶ふ	柏木義圓氏	一六六
六、悔狀	山室軍平氏	一六八
七、深澤翁を思ひ忍ぶ	海老名彈正氏	一六九
四、共愛女學校と故人		
一、女子教育に就て（共愛女學校に關する故人の自記斷片）	故人	一七三
二、深澤利重翁と共愛女學校	周校長	一七九
三、共愛女學校と翁	堀貞一氏	一八一
四、深澤さんと共愛女學校	青柳新米氏	一八四
五、故深澤翁校葬の記（附 葬儀プログラム）	杉山勇司氏	一九一
五、近親者の思ひ		
一、故郷に逝ける父を思ふ	長男 在米國 深澤保貞	一九七

二、わたしの知れる父	秀子	一〇六
三、おちいさんのおさうしき	保貞	
四、おちいさんの思ひ出	孫	
五、おちいさんの死	孫	
六、弱く淋しき父	鈴木	陽
七、お父さまのおもひで	忍	…一二四
	根井	美代
	森	一七七
	本	清吾
	治	一三二〇
	枝	一三二六
八、伯父さんと僕	清吾	一三三四
九、在米の兄へ	妻	
	鈴木	
	木和	
	澤信	
	深澤	
	信	
	息	

六、年譜並に家系

以  
上



故人遺文抄

一、序 文

- 一、日本蠶業論  
二、日露時局論  
一、謹みて同業者諸君に

木下尙江氏

## 深澤君の遺文に序す

深澤利重君、昭和九年十月七日永眠、享年七十九。  
越へて十日、共愛女學校に於て校葬。共愛女學校は、明治廿一年、君が同志と相圖りて創立せし所なり。

君は信念の人なりき。理論の人なりき。而して實に理論を實踐するの人なりき。故に常に時流と相反す。「悲壯」は則ち君の生涯なりき。

遺族、君の爲めに紀念を舊知に頗たんとするの議あり。予即ち君の遺文三篇を擇んで是に應す。君は元と文章の人に非す。然れ共事に當りて必ず識見あり。又た必ず自ら之を筆現す君の性格氣概文字の間に活躍す。君の文章を誦する、猶ほ君と面接するが如し。

「日本蠶業論」

明治三十一年五月三十日東京經濟雜誌社出版

是より先き、金子堅太郎氏歐米視察より歸りて、上州に遊び、其の産業政策を公演す。金子氏の

説は大工業主義に在り。深澤君席末に在り、起つて宿論を吐いて、鋭く金子氏を辯駁す、君の議論は悉く實驗なり。金子氏深く敬聽し、君を旅館に伴うて其の蘊蓄を叩く。

君尙ほ其の意を悉くさず、翌朝汽車を共にして桐生町に赴き、車中盛に談論を鬪はしたりと言ふ。「日本蠶業論」の執筆、其の動機或は爰に在らんか。明治三十一年四月、時の農商務大臣伊東巳代治氏、事を以て俄に職を辭し、金子氏代りて農商務大臣となる。「日本蠶業論」は此の時既に稿成りて翌五月刊行して世に出でぬ。

「日露時局論」

明治三十七年十二月一日稿

今は既に三十星霜の舊史なり。明治三十七年十二月。露國艦隊は遠く亞非利加を迂回して急驅しつゝあり。日本陸兵は肉彈を以て旅順攻撃に焦慮しつゝあり。正に是れ日露戰役の絶峯、日本の全土を擧げて戰争の諷歌に餘念なきの時、君敢然日露親和の宿説を吐きて避くる所なし。罵詈、譏説の聲、君が一身に聚りて、遂に檢舉の説さへ傳唱されたるもの故なきに非す。今日靜に君の文章を讀む、其の激論昂言、尙ほ心膽を寒くするものあり。當年君を怒りて國賊と罵りし人と雖も、今日

君の文章に對して誰か其の眞摯と勇膽とに驚歎せざらん。

「謹みて同業者諸君に」

大正十年稿

是れ君が龍興社を辭して關根に退耕したる際、胸裡の感慨を一篇の文字に托したる自叙詩なり。君是を完了するに至らず、且つ後半紛失して體を成さずと雖も、君を知らんと欲するものゝ爲に、尤も貴重の資料なり。故に多くの文章中於て、特に是を採擇せり。

君が關根に退きて後、大正七年、次女ます子嬢十九歳にして逝く。予言ふ所を知らず。良寛和尚が、子を亡くせる人の爲めに詠じたるもの「思ふまじ思ふまじとは思へども、思ひ出してはしづる袖かな」の一首を書いて君に贈る。君大に是を喜び、和歌數首を送り来る。今其の一首を錄す。

ながめやる 庭の木の間に ふと見ゆる

逝きし 我が子の 後ろ姿の

一昨年、君七十七歳、始めて夫人を伴うて君が故山九州に赴く。歌あり。

九十の母に家を托して金婚

旅行の途に上る

五十年荒波風の友白髪

母を留守居の 春の初旅

予に憂鬱の疾あり。君と語りて常に慰安を得たり。赤城榛名の峯、利根の水。而かも君亡し。予に無限の寂寞あり。

昭和九年十月廿五日

東京西ヶ原の草屋にて

木  
下  
尚  
江

伊香保金太夫庭先にて(明治四十年)



木下尙江氏 同夫人 五男 清吾 故人